

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介（58） 平成 14 年 11 月 1 日

古代の官撰史書（4）

『続日本後紀』(213/51)(K083/44)

『続日本後紀』は『日本後紀』に続く官撰史書で、貞観11（869）年に完成しています。編者は藤原良房と春澄善繩の2名で、全20巻あり、仁明天皇一代の内容となっています。『日本後紀』以前の官撰史書はそれぞれ複数の天皇紀であり、『続日本後紀』のみが一代紀となっています。仁明天皇の在位は18年間です。在位1年間の記録がほぼ1巻に著されており、過去の官撰史書に比べて詳細な記述になり、実録としての性格が次第に強くなっています。

現存する写本はすべて近世以降のものであると言われ、転写する過程で脱文、重出が多いのも『続日本後紀』の特徴です。当館では寛文8（1668）年に京都の立野春節校訂の刊本全10冊と、寛政7（1795）年の再刻本、全10冊を所蔵しており、全20巻が10冊に収まっています。注釈本は江戸期の河村益根の『続後紀集解』、明治期の矢野玄道の『続日本後紀私記』、村岡良粥の『続日本後紀纂話』などがあります。特に『続日本後紀纂話』は18種類もの写本や刊本を集めて校訂して、字句に詳細な注釈を加えた注釈本となっています。

『続日本後紀』の編者は上記の2名の他に、当初は数名いたことが序文によって知ることができます。それによると文徳天皇が先帝である仁明天皇紀がないので、藤原良房、藤原良相、伴善男、春澄善繩、あがたのいぬかいのさだもり 縣犬養貞守の5人に撰集を命じたことに始まります。良房、善繩以外は途中で事情により脱落してしまいました。良房は通称白河殿と呼ばれ、文徳天皇の親戚でもあった人物で臣下初の太政大臣、摂政として当世一の権力者でした。善繩は純粋な学者であり、『続日本後紀』の実質的な編さん者と言えます。

途中で脱落した善男も才知に富んだ人物でしたが、貞観8年に平安京応天門の火災をめぐる疑獄事件である、あうてんもん 応天門の変で伊豆に流されてしまいました。この事件は藤原氏独裁を狙う良房らの陰謀と言われています。『続日本後紀』には良房の名前が多く見られますが、機会があれば国史に名前を載せて、後世まで自分のことを知らしめようという良房の意図が伺えます。他氏を排斥して藤原氏政権の基盤を築いた良房の自己顕示欲のなせるところと言えます。

比較的平和な時代であった仁明朝でしたが、しゅうわ 巻12の承和9（842）年7月の項には、仁明紀最大の事件であった承和の変が記載されています。この変によって皇太子恒貞親王を廃し、良房の妹が生んだみちやすしんのう 道康親王（後の文徳天皇）が皇太子になりましたが、これも良房らの陰謀であるとされています。その他の事件では遣唐使の派遣の記事がでてきます。巻3の承和元年正月には藤原常嗣を遣唐大使に任命したこと、巻7の同5年7月には太宰府湊から遣唐使が出発したこと、巻9の同7年4月には遣唐使の船が帰国したことなどが克明に記載されています。

【参考文献】

『新訂増補国史大系』

(210.088/4A-3)

『国史大系書目解題 下巻』

(210.08/3)

『六国史』

(211.8/15)